

# 課題 4 囲いわなによる効率的なシカ捕獲試験

(開発期間：平成 24 年度～平成 25 年度) 26 年度まで延長

## 試験開発目的

本試験は、シカを効率的に捕獲することで、個体数管理の一助とすることを目的として H24 年度から実施しています。

従来の囲いわなでは、複数頭数捕獲の可能性等がある反面、機動性が悪く(大きい、重い、設置に人役を要する等)、柔軟に対応することが困難です。しかし、「囲いわな」であれば、狩猟期間内に限り、農業者又は林業者が事業に対する被害を防止する目的で設置する場合にあっては、狩猟免許や捕獲許可の申請が不要であることから、農林業者にも普及できるものとして、「箱わな」の天井部を取り除くことにより「小型の囲いわな」として使用することとし、低コストで使い勝手の良い小型囲いわなの開発を当センターで取り組みます。

さらに、捕獲効率を上げるため、誘引試験や捕獲試験を行いながら、捕獲時季や設置場所等についても検証することとしています。

## 試験地

四国の国有林内

## 試験内容

高知県東部、中部、西部の国有林内で、撒き餌でシカを誘引したうえでカメラ撮影を行い、季節別や時間帯別のシカの動向調査を行っています。

箱わなを改良(天井部を開放)した「小型囲いわな」を製作、開発目標を①低コスト化—市販品価格の1/2以下(5万円程度)、②軽量化—120kg以下(軽四トラックに積載できる程度)、③組立・解体が簡単—10～15分程度で可能なものとし、捕獲試験を行いながら開発、改良を重ねています。

また、捕獲効率を上げるため、「捕獲試験」を有効なわなの設置場所、設置期間の検討、捕獲できたシカの分析等を行っています。

## 試験結果 (1 年間延長)

誘引によるシカ動向調査では、季節変動や地域間(標高差)により若干の差異があること、また、1日の行動範囲等はどの地域でも同じ傾向にあることが分かりました(図1)。

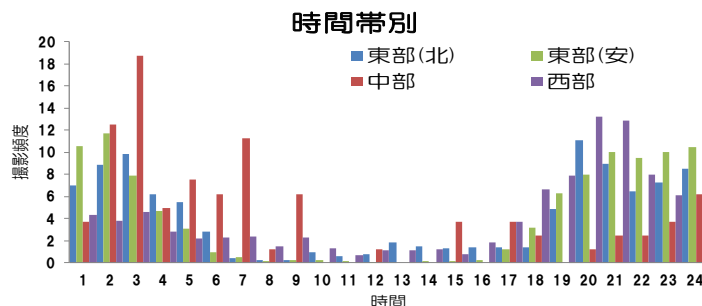


図 1 時間帯別撮影頻度

小型囲いわなの開発・改良においては、ワイヤーメッシュを使用したタイプ7が低コストで、組立・解体も簡単にできるものに改良でき、強度や耐久性にも問題なく十分普及できるものと考えます。なお、さらなる軽量化や機動性の改良に取り組んだ結果、大幅な軽量化が実現でき、軽四トラックに積載可能なタイプ8（小型）を開発しました。

（参考：市販品 重量約 143kg、製作費 102 千円、組立時間：ふたりで 20 分）



タイプ7

約 102kg

約 49 千円

ふたりで 10 分

110×160×220cm



タイプ8（小型）

約 58kg

約 43 千円

ふたりで 5 分

80×130×180cm

重量  
製作費  
組立時間  
横幅×高さ×奥行き



タイプ8は軽四トラックにも積載可



「捕獲試験」については、捕獲できたシカの94%が4才以下でした（図2）。

また、1つの小型囲いわなによる捕獲期間は、1頭目は81%が2週間以内に捕獲できています。しかし、2頭目を次の2週間以内に捕獲できた割合は52%に低下し、30日以上要したケースも35%あるなど、2頭目以降の捕獲には長期間を要する傾向があることが分かりました（図4-1・4-2）。

捕獲時期別では、24年は3～6月に多く捕獲できたものの、夏場は捕獲数が減少、11月以降は再度捕獲数が増加しました。その後、25年についても24年とほぼ同じ捕獲傾向で推移しています（図3）。

これらのことから、捕獲数の増減は、小型囲いわなの設置箇所及び季節の違いによる影響が大きいものと推察されます。

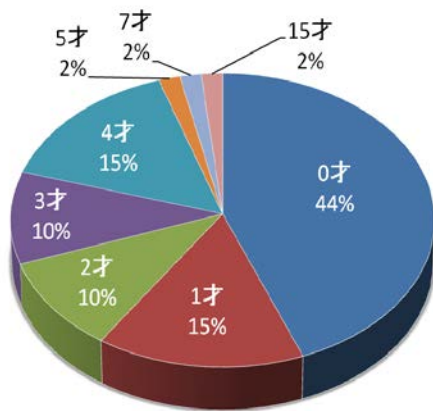


図2 捕獲個体の年齢別内訳

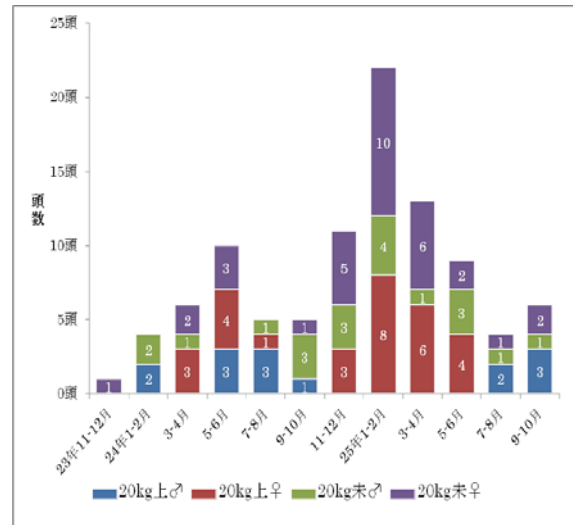


図3 時期別の捕獲頭数

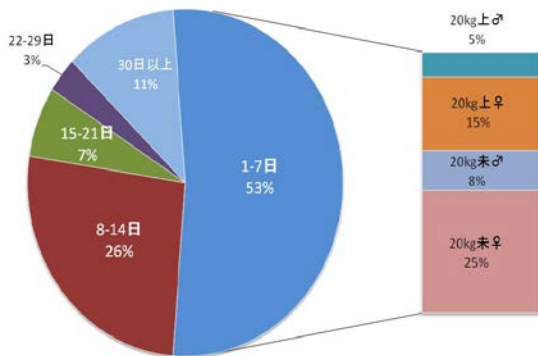


図4-1 設置後1頭目の捕獲に要した期間

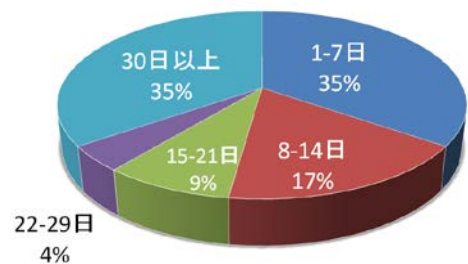


図4-2 2頭目の捕獲に要した期間  
(1頭目捕獲後)

以上のことから、効率的な捕獲に向けては、

① 生息状況の事前把握

事前にシカ道、足跡、糞等により生息密度・状況を把握のうえ、撒き餌を置いて誘引し、十分に採食されていることを確認した上で小型囲いわなを設置する。

② 効果的なわなの移動サイクル

- 1頭目が2週間程度で捕獲できず、撒き餌もあまり採食されていない場合には移動する。
- 1頭目の捕獲後、2週間程度経過しても2頭目が捕獲できず、撒き餌もほとんど採食されていない場合には移動する。

ただし、出産時期が終わりシカの食糧が山に豊富に存在する7～10月頃は、捕獲が減少する時季となるため、小型囲いわなの移動サイクルを延長する等の柔軟な対応も必要。

等が重要と考えられます。